

IT 業界の社長さんたちと語った「留学生」に求めるもの

◆「卒業」とは「業から抜け出して独り立ちすること」

ちょうど就職の時期である。毎年この頃になると、さまざまな学校の卒業式になる。当然に日本語学校だけではなく、日本人であっても、幼稚園から大学まで多くの人新しい道に進む日を迎える時である。

日本語学校の場合は、12 月など、卒業の時期はさまざまであるが、やはり、3 月がメインであろう。これは、一つには、留学生の進学先である大学や専門学校、または就職先である会社における「新年度」が 4 月から始まるためであり、その直前の 3 月が年度の締めくくりということになるのである。

さて「卒業」とは、本来は仏教用語である。「業（ごう）」とは、仏教の世界では身・語・意の三つの業に分けられる。

- ・身業——身体の上に現われる総ての動作・所作のこと。悪業では偷盗（ちゅうとう）・邪淫（じゃいん）・殺生（せつしょう）など。
- ・口業（くごう）——語業ともいう。口の作業、すなわち言語をいう。悪業では妄語（もうご）・両舌（りょうぜつ＝二枚舌）・悪口（あつく）・綺語（きご＝飾った言葉）など。
- ・意業（いごう）——意識・心のはたらきで起こすこと。悪業では貪欲（とんよく）・瞋恚（しんい）・邪見（じゃけん）など。

この三つの「業」によって、報いを受けたり果報があったりというようになる。まさにそのさまざまな人間の苦しみや行動の原因になることが「業」というのである。悪いことが起きた時に「自業自得」などというのは、まさに「自分の業によって自分が得る」ということであり、その結果を甘んじて受けなければならないということにつながるであろう。

その業をひと通り終えて一人前になることを「卒」という。「卒」というのは「兵卒」といって、下級の兵士のことを表す言葉になっていることもあるし、また、「卒倒」のように、突然にという意味でも使われる。一方で「卒去」というように死んでしまうという意味にも使われるのであるが、本来は「独り立ちする」ことを意味することである。それが「急に立つ」というところから「突然に」という意味になり、この世から独り立ちするということでは「死」を意味することになった。そして「業」を抜け出して独り立ちしたことを「卒業」というのである。

この三月に独り立ちする卒業生たちは、日本語学校の場合、「進学」「就職」「帰国」と三

種類の進路があるが、すべての生徒が希望通りになっているわけでもなく、さまざまな思いがあることと思う。日本を好きになり日本の文化に親しんでもらえたのか、そこが非常に気になる。しかし、ひと区切りであるから、「おめでとう」という言葉をかけてあげたい。

◆日本文化の理解と正しい英語を使えることが重要

進路の一つに IT 業界がある。日本語学校から直接ということではなく、いったん大学や IT の専門学校に行ってから、卒業後に日本または海外で、IT 業界に進む生徒がいる。以前、建築建設業界の社長の話を聞いてご紹介したが、今回は、その IT 業界の社長の話を聞いてみたい。業界が異なるとどれくらい認識が異なるのであろうか。

「私の会社では、日本人よりも外国人の方が主力ですよ」

ミャンマーや中国において、公的な仕事を下請けで受けている IT 関連の社長の言葉である。もう少し話を聞いてみよう。

「だいたい、コンピューターっていうのはプログラムで動いているのですが、これはほとんどが英語でできているんです。その英語のプログラムを扱うのは外国人の方が日本人よりもずっとうまい。こうやって言うと、英語圏の人が良いというように聞こえるけど、実際に使えるのは、中国人や ASEAN の人々、つまり英語を母国語としていない人だよ。日本人が日本語をしっかりと主語述語で文法通り話さないのと同じで、英語圏の人も主語を略したりスラングを使ったりするから、コンピューターがなかなか動かない。英語圏以外の人には、単語は簡単なもの、文法は教科書通り、だからコンピューターにわかりやすいプログラムを作ってくれるんだよ」

隣にいた、タイやインドに展開し、ソフト産業を行っている社長が言葉をつなぐ。

「そうだね。日本の文化や日本の感覚、きめの細かいサービスとか、痒い所に手が届くような設計、ボタンの大きさなどの日本的なものが日本の IT 産業の売りだから、その辺の心をわかってくれないと使いやすいプログラムにはならない。一方で、そのプログラムをコンピューターにわからせるためには、正確な英語を使わなければならない。まあ、本当は『プログラム言語』というのですが、その主な構成は英語ですからね。真っ白なコンピューターの脳の中に新たな記憶を打ち込む時に、当然に、正しい言語でないと動いてくれないからね。その意味で、日本で日本の文化を学んだ、文法が正確な外国人というのは主力になるよね。我々から見れば、重要な戦力だね」

「彼ら外国人がいるから、世界的な競争力がある」というのが、数社集まった IT 業界の社長の言葉である。そしてその中で「日本の文化を学んでいる」ということが最も大きく、そして英語やプログラム言語を扱える人材を探しているという。

日本の文化が非常に重要なのは、日本は「サービス」における先進国であり、それを支えるサービス意識や顧客満足度を考える企業風土、そして、日本のソフト産業であるアニメー

ションやキャラクターを使った説明などは、日本文化に根差していると考えられるからだ。あえて「サービス」という言葉に鍵カッコをつけたのは、日本ではサービスとっていないことも、すべて外国ではサービスということになり、そこに料金やチップが払われたりする習慣があるからだ。なんでもお金に換算するというのは、日本ではあまり良いこととは思われてはいないが、一方で、世界ではそのような文化が成立している。チップの文化は、サービスに対する当然の対価となっている場合が少なくない。日本人は、そのような見返りを全く期待しない「親切心」や「助け合い」という言葉で、すべて収めてしまうのである。その意味で、外国にはない特殊なサービス空間が存在する。東京オリンピックが決まった時に「おもてなし」という言葉が流行したが、「おもてなし」をして相手に喜んでもらうということに喜びを感じる、それを当然のこととして行う日本の文化は、海外においても非常に高く評価されている。そのことを損だと思ふような文化の国もあるが、実際に相手に「喜んでもらう」ことは、その喜びを「いつか返してくれる」というようなことになる。まさに、「因果応報」「自業自得」という言葉につながる文化ではないのだろうか。

◆もっともアナログな IT 業界で必要な文化と思考を教えてほしいとの声

では、IT 業界の社長が留学生に期待することは何であろうか。実際に、IT 企業ということになれば、それなりにコンピューターに関するスキルが必要になる。一方、それらの進路においては、日本語学校の関係者の皆さんならばすでにご存じの通り、「特殊技能者」として日本での就労ビザが取得しやすい。その意味で「スキルがあること」というのは、当然のこととして受け取られている。しかし、「スキルがあるだけならば、留学生ではなく、プロのシステムエンジニアを頼ったらよい。派遣社員でスキルのある人もいる。そうではない、社員として力を発揮するのは、そのようなスキルがあることではないんだ」と言うのである。

先出の、ミャンマーなどに進出している社長が言う。

「会社で最も必要なのは、派遣やシステムエンジニアの手抜きやミスを見抜く力。つまり、その意味で特殊技能が必要なんです。社員も当然にプログラムなどを行うのですが、実際に一人ですべてを行うことは少なく、多くの人とチームで作業を進めるのです。スキルに偏った新入社員、特に外国人の社員は、スキルがあるということで天狗になってしまい、チームの和を乱したり、独りよがりの仕事をしてしまったりするものですが、どんなに優秀でも百人のチームに一人でかなうはずがない。そう考えれば、チームで行うことの重要性がわかっていないと話にならないのです。和を以て貴しとなす、IT という先端産業だけに、もっとも古い日本の心を重要視しないとイケないし、そのことがわからない人は使えないんです」

まさに「日本のチームワーク」、もっと言えば「和」を最も重要視するという感じだ。もう一人の社長が同じようなことを言う。

「IT 産業の現場は、孤独にコンピューターに向かっている時間が大きい。その分、コミュニケーションがうまくゆかなかったりして失敗するケースが少なくない。そのように考えた場

合、日本人やクライアントとのコミュニケーション力が必要。それだけではなく、チームの中では『阿吽の呼吸』で進めなければならないから、その雰囲気を共有できることが最も重要なんです」

社内のコミュニケーション力というのは、ITであっても同じということである。そのうえで、日本語学校や大学、専門学校に対して、このようなことを言っているのである。

「日本語というのは、話せるという言語の部分と、日本語で考えるという思考の部分、そして、日本語になった現象を感じる文化の部分と三つの要素がある。日本語学校というネーミングで、どうしても言語の部分ばかり教えていたり、あるいは言語と会話を重視する。しかし、我々が、新しい国に行って言語がなくても友達になったり買い物をしたりする。それは心が通じているからであり、それは文化や思考がつながっているってことじゃないですか。だから、日本語学校も文化と思考の部分を最も重視してもらいたい。そのような授業を増やしてもらいたいと思います。言葉ができて心もできていない人は使えないし、就職してきても全く役に立たない。ITという業界だからなおさら人と人のつながりを大事にするんです。すべての業界の中で、もっともアナログで人間力に頼っているのが IT 業界ではないでしょうか。そのことを大学や専門学校や、もちろん日本語学校にも理解してもらいたいですね」

先端産業だからこそ、人と人のつながりが必要、それも言葉による表面のコミュニケーション力ではなく、心と心のつながりを重視するという。最先端だからこそ、それが最も重要であるというこの考え方が、日本の IT 産業の先進性を力強く支えている柱であるということ、そしてその中にある日本の文化と思考の重要性を、改めて教えられた気がする。

卒業シーズン、この時期に我々は、このような人材を世に送り出してこられたのであろうか。